

3月14日午前11時、原発3号機もついに爆発した。それを長谷川健一さん()はテレビで見た。「放送では『大きな音がしました』なんて、はっきりは言いませんでしたが、映像からは爆発したとしか思えない」。心配になって夜9時ごろ震災対策本部がある村役場に車を走らせたという。

「俺は慌てて村役場に飛んでいったのよ。そしたら役場には放射線を測っている担当者がいたの。『なんぼくらいあるんだ?』って訊いたら、彼は『40(マイクロシーベルト)は超えているだ』って。俺は、その数値の具体的な危険について分からなかったよ。でも、とんでもない数値だってことは分かった。だから何かしなくちゃなんないべ。俺は前田地区の区長もやってるから。集落の人も守る責任もあっから。それで急いで役場を出ようとすると、その役場の担当の職員がこう言うのよ。『誰にも言わないでくれ。村長に口止めされているんだ』って」

長谷川健一さん 福島県飯舘村の酪農家で、村に20ある行政区のひとつの前田行政区の区長を務める

「11/21~27、FoE Japan ドイツ各地で福島の実験を報告」

開催団体：国際環境 NGO FoE Japan (フレンズ・オブ・ジ・アース・ジャパン)

BUND (ドイツ環境自然保護連盟 / FoE ドイツ)

日独平和フォーラム (ベルリン)

ドイツ放射線防護協会 (ベルリン)

2011年11月27日 ベルリンにて、長谷川健一氏のスピーチ

私は、福島第1原発事故のヒバクシャです。私の住む飯舘村にプルトニウムが降ったのです。放射能は目に見えませんが、もし見えるならば、私の体は今、ドイツの街を輝かせるクリスマスの飾りのように光っていることでしょう。

事故が起こってすぐ、私は原発がおかしい、何かが起こっているのではと強く思いました。そして、新聞に3号機の爆発が発表された3月14日、私は慌てて村役場に飛んで行きました。「原発はどうなっているのですか」と問いただすと、「大変なことが起きている。空間放射線量が40マイクロシーベルトを超えている」という説明を受けました。驚いた私が部屋を出ようとすると、役場の人はこう言うのです。「誰にも言わないでくれ。村長に口止めされているんだ」。

しかし、私はすぐさま部落に帰り、言うなと口止めされたことなど気にせずに部落の人に危険を知らせました。翌朝、3月15日の朝、6時半に地区の人が続々と集まって来ました。そのとき、外は雨が降っていて、そのうち雪に変わりました。後でわかったことですが、ちょうどその頃、飯舘村の放射線量は100マイクロシーベルトを超えていたのです。それを知らせてくれたのはジャーナリストの方です。大勢のジャーナリストが村に来ていたのです。私は、地区の住民に言いました。「外にはなるべく出るな。どうしても出なければならぬのなら、マスクをしろ。肌を出すな。外から帰ったら玄関で服を脱ぎ、風呂に入るかシャワーを浴びるかしろ。畑の野菜を食べてはいけない。換気扇を回すな」と。そのとき、北西の風が吹いていました。飯舘村は原発からの放射能の風をまともに受けてしまったのです。

私は、ジャーナリストをかき集め、訴えました。「飯舘村を避難対象にしてくれ。どうか、それを報道してくれ」。しかし、それはかないませんでした。避難を希望する者がいるなら避難してもよいが、村は避難対象にならないと言われたのです。ですから、一部の人が避難しませんでした。

これは公式に発表された村の放射線量です。3月15日の午前6時20分のところを見て下さい。44.7マイクロシーベルト/時と書いてあります。ジャーナリストから知らせてもらった数値は100マイクロシーベルト以上です。なんという違いでしょう。公の発表は正しい数値ではないのです。嘘の報道をしているのです。そして、国や県から専門家達が次々に村にやって来ました。みんな口々に、大丈夫だ、安心しろと言います。

しかし、その少し後に、今度は別の大学の先生のチームがやって来て、村中の放射線量を測りました。先生は「おそろしい。こんなところに住んではいけない。私達が集めたこのデータを村長のところへ持って行ってください。避難しなければなりません」と言いました。しかし、村長は「このデータは公表しないでくれ!」と叫んだのです。村長は村を守ろうとしました。村をゴーストタウンにすたくなかったのです。そのまま2ヶ月半もの時間が経過しました。避難せずに住み続け、子ども達を被曝させてしまいました。

その後、村は計画避難区域に指定されましたが、その前日の4月10日には国の方から偉い学者がやって来て、安全だと言っていたのです。それなのに、翌日の11日になると、「危険だ! 避難しろ」と突然言われ、村民は怒りました。

私は酪農家です。この写真は私が事故後に牛乳を捨てているところです。毎日、牛乳を捨てました。村が避難の対象となったとき、牛は連れて行ってはいけないと言われました。私達は泣く泣く酪農を諦めることになりました。この酪農家の奥さんは、牛が乗ったトラックを「ごめんね。ごめんね」と言いながら追いかけてきました。そしてこの若者は、東京生まれで、どうしても酪農がやりたくて村へ移住して来た人です。飯館で10年間酪農をやって、ようやく軌道に乗ったとき、それを諦めなければならなくなりました。彼はそれが悲しくて泣いているのです。飯館村では、村人がみんなで力を合わせ、良い村作りに励んで来ました。日本一美しい村に推薦され、認められた村です。その村が放射能に汚染されました。

そして、ある日、私がもっとも恐れていたことが起こりました。相馬市の同じ酪農家の友人が自殺したのです。この写真に写っているのは友人が亡くなる前に壁に書き残した言葉です。「原発さえなければ」と書いてあります。「2011年6月10日 1時30分 大変お世話になりました。私の限度を超えました。ごめんなさい。原発さえなければと思います。残った酪農家は原発に負けずに頑張ってください。仕事をする気力を無くしました」。時期を同じくして、隣の地区の102歳のおじいちゃんも自殺しました。南相馬市の93歳のおばあちゃんも「墓へ避難します」と書き残して自殺しました。こういうことが次々に起きたのです。これからも起こるでしょう。

これは7月下旬の私の自宅の雨どいの線量です。27.62 マイクロシーベルト/時と出ています。現在、村民はみな避難していますが、我々は24時間体制でパトロールしています。雑草が伸びきって、温室の屋根を突き抜けています。これが今の飯館村の姿です。

私は、国が原子力を推進して来たのだから、国は事故の対策をきちんと取ることができるのだらうと思っていました。ところが、事故が起こって、今頃、どうやって除染をしたらよいかの実験をやっているのです。私達村民は、村に戻れるのかどうかもわからない状態です。でもただひとつ、はっきり言えることは、私は子どもや孫を飯館村へは絶対に返さないということです。飯館村の面積の70%は山です。家の周りや農地をいくら除染しても、山の除染はできませんから、山から放射能が移動して来るのです。我々は今から何年か後に、村を捨てる決断をしなければならいかもしれません。可哀想なのは子ども達です。子ども達は飯館村というステッカーを一生背負って生きて行かなければなりません。広島や長崎の被爆者とおなじように、差別を受けることになるでしょう。そんな差別の起きない社会を私達はなんとしてでも作っていかねばなりません。

今回このようにしてドイツを周り、私はドイツは素晴らしい国だと思いました。なぜなら、福島原発事故の危険をきちんと見極め、ドイツは脱原発を決めたからです。それに引きかえ日本という国は、こんな事故が起こってもなおかつ、原発を再稼働するという。それどころか、原発を輸出しようとするしているのです。そんなことは絶対に阻止しなければなりません。これからは、日本人も声を大きくし、戦っていかねばならないのだと思います。

福島・飯舘村に放射線量の表示機器、常時測定へ

放射線量常に表示飯舘村に機器設置 村全域が計画的避難区域となり、住民の避難が進められている福島県飯舘村の役場前に28日、放射線量を常時測定して表示する機器が設置された。

東京電力福島第1原子力発電所の事故を受け、東京のシステム会社が開発し、同村に無償で設置した。

機器は、子供の身長に合わせて、高さ50センチの空気中の放射線量を測定。電光掲示板（縦計約30センチ、横約25センチ）に、10秒ごとに更新された数値が表示される。データを蓄積できるため、後に分析することも可能という。

設置に立ち会った菅野典雄村長は「村民は正確な放射線量を知りたがっており、これなら多くの人が数値を見ることができる。住民の説明資料にも活用したい」と話していた。



豊田直巳著『フクシマ元年 原発震災全記録 2011-2012』（毎日新聞社 2012.03.30） 92～93頁

「までいライフ」という言葉を掲げ、(略) 原発に象徴されるような、便利だがすぐ飽きてしまう、使い捨てで他力本願の暮らしと対極の生活が目指されていたのだろう。それを牽引したのが菅野典雄現村長である。その村長が、村の放射能汚染の実態の公表を「口止めした」ことを、私はどう考えればいいのだろうかと思うのだ。

4月に入って村役場前に設置された大型の電光掲示板の放射線線量計が4.5マイクロシーベルトを表示する中、賓客を案内する菅野村長が「こんなの見なくていいの」と不機嫌な顔でぼそりと漏らす声を、私自身が聞いている。しかし(略)